

『サスティナブル・トラベル・KAIDO 街道』 街道 15,000Km、埋もれた「文化」を掘り起こす旅

○発表者：原田伸介（イベント学会中部地域本部事務局長）

共同研究者：稲本正（中部地域本部）、エバレット K ブラウン（中部地域本部）、
井上直(Teshigoto Gumi)

キーワード：「文化の掘り起こし」「文化再生」「文化編集」「文化追体験」
「大人のための SDGs 街 Café」「文化のお遍路」

【1】目的：持続可能な観光の実現に向けて、“歩くこと”そのものを観光資源とする『街道観光』に着目し、街道を歩きながらそこに眠る歴史や文化を掘り起こす体験（カルティベート）を中・長期滞在しながら提供するプログラム『サスティナブル・トラベル・KAIDO 街道』を推進している。歩いて観光するという究極のエコロジー性と、従来の観光資源の消費ではなく地域に眠る歴史・文化を掘り起こし、それを将来わたる観光資源として商品・サービス化していくという持続可能性を持った観光計画であると考えている。コロナ後、観光におけるインバウンド需要が更に増える事が予想される中、日本でもいよいよ巡礼の旅が始まる時代になっていく。欧米やアジア諸国から見ればまさに「日本は文化の博物館である」と岡倉天心が云った様に、日本全国 15,000Km の街道沿線には根の深い歴史を背負った文化が眠っている。それをノスタルジーだけではなく現代に通用するモノ、サービスにアップグレードさせて提供する『磨き上げ』を行う事で価値を高めて新しい観光計画とする事を目的としている。

【2】方法：イベント学会中部地域本部で継続的に実施している観光街歩き『大人のための SDGs 街 Café』は、サスティナブル・トラベル・KAIDO 街道のケーススタディーとして様々なステークホルダーに各地の街道にお越し頂き実施している。

街道沿線に眠る『物語性のある文化』、特に名所旧跡、神社仏閣、石碑などの有形なハード文化ではなく、無形のソフト文化（歴史、風土風習、祭、食、工芸など）に着目してそれらを感じと匠の技で磨き上げ、地域の新たな地域観光資源としていく。それらにテーマを持たせてそれらを巡る『文化のお遍路』に仕立て直していく。既に『東海道：有松鳴海宿』『郡上街道：美濃和紙の里』『参宮街道：伊勢河崎』と3回実施して来た。

- ・文化を再生する：かつて存在した技術や効率優先のために使われなくなった手法を現代に蘇らせ、現代に通用する感性やアレンジで付加価値を持たせて商品化する。
- ・文化を編集する：「五節句」「二十四節季」などに因み、花見弁当に酒器などの日本の四季と工芸を掛け合わせて楽しんで来た日本の文化。これを「工芸遊山」と題し現代の暮らしと工芸を楽しむ機会を提供する。
- ・文化を追体験する：日本の観光の原点とされる「お伊勢参り」それを可能にしたのが「伊勢御師」。江戸時代から続く17代目御師の話に耳を傾け、彼らが実施していた「聞香」などの体験し、御師邸で振舞われた食事等を体験する。

【3】結果：

文化を再生する ～東海道有松～

愛知を代表する伝統工芸品『有松絞り』は、そのほとんどが化学染料で染められている。そこで『本物の蓼藍』を使った有松絞りを再現するにあたり『物語性を持たせる』十辺舎一句の『東海道中膝栗毛』の主人公弥次喜多が、旅の途中有松で有松絞りの手拭を買うシーンがあるが、専門家の時代考証を経て『弥次喜多買った（であろう）手拭い』を再現する事で文化の再生を図る。また、有松絞りの「藍」で有松の街を活性化する試みとして『藍』を使ったスイーツの開発を徳島大学宇都教授が開発した『藍パウダー』を使って商品化を計画する。

文化を編集する ～郡上街道 美濃和紙の里

工芸を愛でる日本の四季を楽しむ文化の再現、現代の生活に匠の技『工芸』を活かす物語づくりをする。『五節句』『二十四節気』などに因み、花見弁当に酒器など四季の変化と工芸を掛け合わせて楽しんできた日本の文化。この文化を『工芸遊山』と題し、『冬至』をテーマに実施。現代の暮らしと工芸などの興味深い話と共に冬至に因んだ天心茶会を開催。東海地方の工芸を楽しむ『工芸遊山』では柳宗悦やバーナード・リーチも訪れた『瀬戸焼/本業窯』 「ワインのように和紙を楽しむ」がコンセプトの和紙ソムリエの資格を持った職人がお出迎えする『美濃和紙』 50年以上一つひとつ手作業する『名古屋提灯』 400年以上続く伝統的工芸品『有松絞り』などが参加した。



文化を追体験する ～参宮海道 伊勢河崎

日本の観光の原点とされる『お伊勢参り』江戸時代の最盛期（天保時代）には年間5百万人もの参拝者が伊勢を訪れた。当時の人口が約3万人とすると、なんと6人に1人がお伊勢参りをしたことになる。5百万人もの参拝客の『お伊勢参り』を可能にしたのが『御師』の存在。御師とは伊勢神宮から各地に出向いた神職で、室町時代から各地に出向いて祈禱を受け付けたり暦やお札、伊勢土産を配ったり金銭やお米の奉納を勧めお伊勢参りをPRし続けてきた。『御師』は参拝客の“おもてなし”のために『茶の湯』や『聞香』『和歌』などを嗜み自らの素養を高めた。ここではその『御師の文化の追体験』を計画する。

【4】考察：御師・丸岡宗太夫に、ある講の宿泊記録が残っており17名が伊勢だけで5泊6日して、その料金は総額60両、今の金額で600万円から1,000万円。大金を使った旅行に驚かされるが、『御師』の役割は旅への案内から現地でのガイド、食事、宿泊の手配、歓楽街への案内まで、まさにコンシェルジュとして機能しており、これからの観光を考える時、文化を軸にさまざまな“体験”を提供する『御師』的な目利きの存在が『サスティナブル・トラベル KAIDO 街道』の成立を可能にする鍵となるものと思われる。

【5】結論：文化のソフト（歴史・風土風習・祭・工芸・食等）を掘り起こし、感性と匠の技で現代に通用するモノやサービスにアップグレードさせて提供する、磨き上げる旅『文化のお遍路』が鍵となるが、『文化はそれ自体を“耕し続ける事”が重要』で、それこそが持続可能な観光を可能にしていく事と思われる。